

『What a Wonderful World』

令和5年6月5日

先生方が学校で忙しく子ども達のために頑張っていた5月30日(火)。私は、第5類へ移行した例の病気のために、少し朦朧としながらも映画「グッドモーニング・ベトナム」(1987年 アメリカ)を見ました。ロビン・ウィリアムズ主演のこの映画は、ベトナム戦争下のサイゴンを舞台に実在した米軍ラジオディスクジョッキー(以下 DJ)をモデルにした映画だそうです。



明日をも知れぬ米兵の心を、DJの饒舌なトークとファンキー & シャウトな R&R ミュージックで癒し、米軍基地はほんのひと時だけ笑いの渦に包まれます。流れる曲は、ビーチボーイズ、ボブ・ディラン、ジェームス・ブラウンなどの当時の代表曲です。ロビン・ウィリアムズ演じる DJ のマシンガントークと、いかにもアメリカらしい冗談の連発に、意識朦朧下の私も少し元気付けられるような気がしました。

映画の後半の差し掛かりに、ルイ・アームストロングの「What a Wonderful World」(1967年)が流れます。曲に合わせて、南ベトナムの美しい田園風景を米軍機が爆撃しナパーム弾がさく裂する映像が流れます。一方、対極的にあるかのように朝やけに美しく映えるホワイトハウスも写しだされます。世界は、存在する同時時間帯で、いくつもの異なった表情を垣間見せるのです。一方では悲劇や苦しみを、その一方では静謐のうちに過ぎる何事もない日常の時間を…。写し出されるのはどれも現実の世界の姿なのです。どの場所と時代に生まれ生きるのかは「運命」という言葉だけで簡単に片づけられないものがあるのです。

この映画で印象的な場面が私にはあります。全米各地からベトナムに動員された若い米兵達、主人公の DJ は、可



能な限り一人一人に声をかけ、その米兵にあった冗談を浴びせかけるのです(左のシーン)。ですが、トラックに乗って立ち去っていく彼らの姿を見送る主人公の悲し気な表情に、私は強くひつけられました。屈託なく、アメリカの若者らしく大笑いする姿の何処かに、戦場で命を落とす死の影を感じ取っている表情なのです。ルイ・アームストロングは晩年、「What a Wonderful World」を歌う時、そのイントロで次のように語っていたそうです。「最近若いやつらがよく俺にこう言うてくるんだ。この素晴らしき世界ってどういう意味なんですか？世界中で戦争が行われていますよね。それでも素晴らしいって言うんですか？飢饉や環境汚染の問題もあります

よね。全然すばらしくなんてないですよ。落ち着いてこのおじさんの言うことに耳を貸してくれ、俺には世界がそんなに悪いって思えない。人間が世界にしていることが悪いんだ…」と。

I see trees of green	Red roses too	緑の木々が見える	赤いバラも
I see them bloom		咲いているんだ	
For me and you	And I think to myself	僕と君のために	そして 一人思う
What a wonderful world		何んて	素晴らしい世界なんだ

かしながらそれが大国の思惑や指導者の妄信にも似た政治的・歴史的信条により国際的、地域的危機が頻し多くの命が奪われるとしたのなら…「もし、もっとみんながお互いを愛し合ったら沢山の問題なんて解決される。そして世界はとびきり面白くなる。だからこのおいはばれは言い続けるのさ…What a Wonderful World」。私たちは、その素晴らしき世界を意識して守り保持し続けなければならないと思うのです。

